HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	資料紹介 三浦（堀田）綾子の「アララギ」掲載歌
著者	田中，綾；池田，和利；TANAKA，Aya；IKEDA，Kazuto
引用	北海学園大学人文論集(57)：226（一）-204（二三）
発行日	2014-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

資料紹介　三浦（堀田）綾子の「アララギ」掲載歌

田中　綾・池田和利

キーワード　三浦綾子、「アララギ」、土屋文明、『道ありき』、『この土の器をも』、歌集未収録

今年は、三浦綾子の代表作『氷点』発表から五〇年目にあたる。三浦綾子記念文学館での記念事業や、北海道文学館での特別展なども開催され、世代を超えて三浦作品が読み継がれていることをあらためて実感している。

作家デビュー以前の創作活動であった短歌について、公益財団法人北海道文学館編『資料情報と研究　２０１３』（二〇一四年三月）に、田中綾「三浦（堀田）綾子の短歌――「アララギ」土屋文明選歌の考察」を執筆した。その直後、三浦綾子の単行本未収録エッセイ四一篇を収めた『ごめんなさいといえる』（小学館、同年）が刊行された。そこには、短歌に関するエッセイも収められており、偶然のこととは言え、三浦綾子の短歌を考察する好機ではないかと感じている。

三浦綾子の短歌の研究については、上出恵子氏による、「旭川アララギ会々報」発表の短歌の調査が何よりも大きな業績である。[1] その労作を補うかたちで、本稿では、地方組織である「旭川アララギ会」の母体であった「アララギ」本誌掲載の短歌を資料として提示したい。

「アララギ」掲載歌は、一九四九年から六一年までの全一七八首である。当初は旧姓「堀田綾子」での掲載であり、一九五九年一〇月号掲載作から、結婚後の「三浦綾

（一）

子」名となった。

のち、これら「アララギ」掲載歌は、三浦光世氏との合同歌集『共に歩めば』（聖燈社、一九七三年）にまとめられたが、この度の調査で、歌集未収録の作品が八首あったことがわかった[2]。

また、自伝的小説である『道ありき　青春編』（主婦の友社、一九六九年）にも自作短歌が四三首引用されているが（うち三首は二回ずつ引用）、その中の二〇首は「アララギ」掲載歌である（うち二首は二回ずつ引用）。

その続編にあたる『この土の器をも　道ありき第二部／結婚編』（主婦の友社、一九七〇年）にも、自作短歌が一一首引用されており、その中の九首が「アララギ」掲載歌であることも確認できた。

小説引用に際しての異同は本稿では示さないが、いくつかの異同があることは、前出の拙稿「三浦（堀田）綾子の短歌」でもふれている[3]。

以下、資料紹介となるが、歌番号は便宜上のものである。また、初期作品は「旭川アララギ会々報」及び、誌名変更後の「旭川アララギ月報」掲載を初出とするものもあり、それらについては併記し、異同を傍線で示しておいた（旧字・新字の異同については特にふれない）。なお、「アララギ」本誌では選者による添削が慣例的に行われており、そのための異同である可能性もあることを付言しておきたい。

（二）

「旭川アララギ会々報（ママ）」第一号（発行年月日不明）

夜半に帰りて寝着にも更へず寝る吾をこの頃父母は咎めずなりぬ

「アララギ」一九五〇年二月号　其二　土屋文明選

1・夜半に歸りて衣服も更へず寝る吾を此頃父母は咎めずなりぬ

※のち、『道ありき』一五章で引用。

「旭川アララギ会報」第四号（一九五〇年一月二八日）

凍りたる蜜柑を口に含み居れば俄かに熱き泪溢れ來ぬ

フオルマリンの匂ふ寝卷に着更へつつ心素直になりて行きたり

「アララギ」一九五〇年四月号　其二　土屋文明選[4]

2・凍りたる蜜柑を口に含み居れば俄かに熱き涙溢れ來ぬ

3・フォルマリンの匂ふ寢巻に着更へつつ心素直になりて行きたり

※3はのち、『道ありき』二一章で引用。

「旭川アララギ会報」第六号（一九五〇年七月一〇日）

病む君が三日かかりて書き呉れし葉書にあゝ冗談なども書いてある

「アララギ」一九五〇年七月号　其二　土屋文明選

4・病む君が三日掛りて書き呉れし端書にああ冗談等も書いてある

「アララギ」一九五〇年一〇月号　其二　土屋文明選

5・乾パンを食べる自炊生活も樂しきを歌に詠へば佗しげとなる

「旭川アララギ会報」第七号（一九五〇年八月二〇日）

いつの日か逢ふ事あらむ片目細める表情も俄かに悲しきものとなりぬ　（異同なし）

「アララギ」一九五〇年一一月号　其二　土屋文明選

6・いつの日か逢ふ事あらむ片目細める表情も俄かに悲しきものとなりぬ

「アララギ」一九五〇年一二月号　其二　土屋文明選

7・吾が髪をくすべし匂ひ満てる部屋にああ耐へ難く君想ひをり

「旭川アララギ会報」第一〇号（一九五〇年一一月一二日）

二月九日霧が流れゐし夜のこと吾程憶えてゐては下さらぬ君

「アララギ」一九五一年一月号　其二　土屋文明選

8・二月九日霧が流れ居し夜のこと吾程覺えてゐては下さらぬ君

「旭川アララギ会報」第一一号（一九五〇年一二月三日）

カルテ一杯にドイツ語を書きなぐるこの医師も熱発の原因を語りて呉れず

（三）

「アララギ」一九五一年二月号　其二　土屋文明選

9・カルテ一杯に獨逸語を書きなぐる此醫師も熱發の原因を語りて吳れず

「旭川アララギ会報」第一三号（一九五一年二月一一日）

自から辿り行く過程か吾が歌を批評し吳るる事も稀まれとなりし君

朝霧に馬鉄のひづめが聞え来て君の張りある笑ひ声も聽ゆ　（異同なし）

「アララギ」一九五一年五月号　其二　土屋文明選

10・自ら辿り行く過程か吾歌を批評し吳るる事も稀まれとなりし君

11・朝霧に馬鐵のひづめが聞え來て君の張りある笑ひ聲も聽ゆ

「アララギ」一九五一年六月号　其二　土屋文明選

12・牛乳配達をして育ちたる吾なるに「お嬢さんね」と言ふ友があり

（四）

「アララギ」一九五一年七月号　其二　土屋文明選

13・われが父を愛する氣持の曲折は心理學教科書に簡單に分類されてありぬ

「旭川アララギ会報」第一六号（一九五一年五月二七日）

床頭の洗面器を鳴らして母を呼ぶ吾が細き手を君が見てゐる

「アララギ」一九五一年八月号　其二　土屋文明選

14・床頭の洗面器を叩きて母を呼ぶ吾が細き手を君が見てゐる

「旭川アララギ会報」第一八号（一九五一年七月一五日）

機嫌とられゐると知りつつ機嫌よく振舞ひし一時間ただに疲れぬ

導かれつつ叱られつつ来し二年何時しか深く愛して居りぬ　（異同なし）

「アララギ」一九五一年九月号　其二　土屋文明選[5]

15・機嫌取られゐると知りつつ機嫌よく振舞ひし一時間唯に疲れぬ

16・導かれつつ叱られつつ來し二年何時しか深く愛して居りぬ

「アララギ」一九五一年一〇月号　其二　土屋文明選

17・愬へたき想ひにベツドに待ちゐれば汗拭ひつつ君入り來る

「アララギ」一九五一年一一月号　其二　土屋文明選

18・部屋中に便器使ふはかく迄も淋しきものと思はざりきに

「旭川アララギ会報」第二〇号（一九五一年九月一六日）

下着も着物もみな姉の古を着て露草乱るる土手に逢ひゐる

「アララギ」一九五一年一二月号　其二　土屋文明選

19・下着も着物も姉の古を着て露草亂るる土手に逢ひる

「旭川アララギ月報」第二一号（一九五一年一〇月二一日）

相病めば何時迄続く幸ならむ唇合はせつつ泪滾れき

「アララギ」一九五二年一月号　其二　土屋文明選

20・相病めば何時迄續く幸ならむ唇合はせつつ泪こぼれき

「旭川アララギ月報」第二三号（一九五一年一二月一六日）

五十才の社長夫人に何時もいつもコーヒーを奢られてゐるあなたは嫌ひ

「アララギ」一九五二年二月号　其二　土屋文明選

21・五十歳の社長夫人に何時も何時もコーヒーを奢られてゐるあなたは嫌ひ

22・母一人又冷飯を食べてゐるそれでは樂しい夕餉とならぬのに

※21はのち、『道ありき』二三章で引用。

「旭川アララギ月報」第二四号（一九五二年一月二〇日）

仰向きしままに紅刷く和田さんを泉さんが手鏡で見てゐる安静時間

「アララギ」一九五二年三月号　其二　土屋文明選

（五）

23・仰向きしままに紅刷く和田さんを泉さんが鏡で觀てゐる安静時間

「アララギ」一九五二年四月号　其二　土屋文明選

24・喘鳴が漸く收まりし君の胸に三十秒程抱かれ別れ來りぬ

「旭川アララギ月報」第二七号（一九五二年四月二四日もしくは二〇日）

相病みてこのまま果つべし一度でも君に抱(いだ)かれ臥たしと想ふ

天理教の本より読まぬ母のこと夜半の目ざめに思ひてゐたり

「アララギ」一九五二年六月号　其二　土屋文明選

25・相病みてこのまま果つべし一度でも君に抱(いだ)かれ臥したしと思ふ

26・天理教の本より讀まぬ母のこと夜半の目醒めに想ひてゐたり

（六）

「アララギ」一九五二年七月号　其二　土屋文明選

27・平和よりも獨立よりも君が病狀は吾が關心事の第一にして

「アララギ」一九五二年八月号　其二　土屋文明選

28・離れ病む君に書く時化粧する慣ひは何時の頃よりならむ

「アララギ」一九五二年一〇月号　其二　土屋文明選

29・英語多く混へて語るあなたの平和論それは雜誌「世界」で私も讀みました

「アララギ」一九五二年一一月号　其二　土屋文明選

30・萩群るる彼方に牛が移り行き夕陽の丘に二人のみなりき

「旭川アララギ月報」第三三号（一九五二年一〇月一七日）

「異性への伝道はむづかしいです」五十五才の西村先生の言葉忘れられず

「アララギ」一九五二年一二月号　其二　土屋文明選

31・「異性への傳道はむづかしいです」五十五歳の西村先生の言葉忘れられず

「アララギ」一九五三年一月号　其二　土屋文明選

32・愛情かはた慾情か荒々と抱き給へば吾は淋しき

「アララギ」一九五三年三月号　其二　土屋文明選

33・ああ逢ひ度しとギプスの中に臥してゐぬあの廊下を曲れば君の病室なのに

「アララギ」一九五三年四月号　其二　土屋文明選

34・何氣なくギプスベッドを叩き居しに氣づきて俄かに淋しくなりぬ

「アララギ」一九五三年六月号　其二　土屋文明選

35・手術前はもつと優しかつたと思ひ乍ら細くなつた君の手を取る　・札幌[6]　堀田綾子

「アララギ」一九五三年八月号　其二　土屋文明選

36・君とゐてなほも淋しきこの夕べ聖句幾つか胸に浮び來　・札幌　堀田綾子

「アララギ」一九五三年九月号　其二　土屋文明選

37・淫賣も乞食も强盗も既に居き今と變らずキリストの時代も　・札幌　堀田綾子

「アララギ」一九五三年一一月号　其二　土屋文明選

38・ベッドよりずり落ちさうな吾が蒲團を直して歸り給ひしが最後となりぬ　・札幌　堀田綾子

※のち、『道ありき』三七、四〇章で引用。

「アララギ」一九五四年四月号　其二　土屋文明選

39・何を語りしか記憶も大方薄れたれど軽石多かりき斜里の海岸

「アララギ」一九五四年六月号　其二　土屋文明選

40・病む友の一人一人の名を呼びて祈る聖畫の下に臥す

（七）

日々

※のち、『道ありき』四四章で引用。

「アララギ」一九五四年七月号　其二　土屋文明選

41・繰返し過去(すぎゆき)のみを想ふ日々病みて老いたる如くなりしか

「アララギ」一九五四年八月号　其二　土屋文明選

42・しつかりと抱き合ひて居りたるに君のみ遂に遂に逝きたり

43・雲ひとつ流るる五月の空を見れば君逝きしとは信じがたし

※43はのち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五四年九月号　其二　土屋文明選

44・君死にて淋しいだけの毎日なのに生きねばならぬかギプスに臥して

45・君逝きて日を經るにつれ淋しけれ今朝は初めて郭公が鳴きたり

※二首とも、のち、『道ありき』四三章で引用。

（八）

「アララギ」一九五四年一〇月号　其二　土屋文明選

46・君が形見の丹前に刺しありし爪楊枝を見れば泪のとまらざりけり

47・耳の中に流れし泪を拭ひつつ又新たなる泪溢れ來つ

※二首とも、のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五四年一一月号　其二　土屋文明選

48・闇中に眼開きて吾は居りひよつとして亡き君が現はれてくれるかも知れず

※のち、『道ありき』で四三章で引用。

「アララギ」一九五四年一二月号　其二　土屋文明選

49・暖かき君の手と感じつつ醒む醒むればああ五ヶ月前に君は死にゐき

「アララギ」一九五五年一月号　其二　土屋文明選

50・原罪の思想に導き下されし亡き君の激しき瞳(め)を想ひ

ゐつ

51・山鳩の鳴きゐる夕の丘なりき跪きイエスに共に祈りき

※二首とも、のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五五年二月号　其二　土屋文明選

52・幼子を撫づる如くに吾が頭を撫でて病室を出でて行く父

「アララギ」一九五五年三月号　其二　土屋文明選

53・妻の如く想ふと吾を抱きくれし君よ君よ還り來よ天の國より

※のち、『道ありき』四三、五一章で引用。

「アララギ」一九五五年四月号　其二　土屋文明選

54・丘に佇ち君に撮されゐし時もこんなに淋しい顔をしてゐたのか

同号　其三(7)

55・君の寫眞に供へし蜜柑を下げて喰ぶるかかる淋しさは想ひみざりき

※のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五五年五月号　其二　土屋文明選

56・握手して別れて行けば君は又君の生活に還りゆくべし

同号　其三

57・癩園の人らの爲に祈りつつ逝きしてふ死刑囚君の最期を聞きぬ

「アララギ」一九五五年六月号　其二　土屋文明選

58・さまざまの苦しみの果てに知りし君その君も僅か五年にて逝きぬ

同号　其三

59・キリスト村より屆きし卵を一つ一つ掌(て)に載せてゐきギプスに臥して

60・冷淡に交はり乍ら兄弟姉妹(きやうだいしまい)と呼ぶなりクリスチヤンわれらの世界

※58はのち、『道ありき』四三章で引用。

（九）

「アララギ」一九五五年七月号　其二　土屋文明選

61・コルセットを着て漸くに立つ吾を亡き君の寫眞が見てゐて下さる

同号　其三

62・椅子より立ちて何か云はむとする表情しばらくにして又坐りたり

63・平靜に平靜にと振舞へど夏みかんの皮をむく時指がふるへき

「アララギ」一九五五年八月号　其二　土屋文明選

64・君が逝きし午前一時を廻らねば睡られぬ慣ひに一年過ぎつ

65・女よりも優しき人と云はるれど主張曲げし事は君になかりき

※64はのち、『道ありき』四五章で、65は同四三章で引用。

同号　其三

66・齋藤茂吉の随筆を贈りくれし君ドイツ語は皆欄外に譯し下されてゐき

（一〇）

「アララギ」一九五五年九月号　其二　土屋文明選

67・五年ぶりにて下駄を履きにき土の上にああ生きてわたしは立つてゐる

68・青く透くビニールの布を胸に敷き膳を待ち居れば郭公の聲

「アララギ」一九五五年一〇月号　其二　土屋文明選

69・苺ジュースを一口飲みてさりげなく話題を變へしに氣づきて居りぬ

同号　其三

70・亡き君の澄みたる瞳を想ひつつ人に手を取られ吾がゐたりけり

71・年下の君に優しくもの言ひて吾の心の落着きてゆくりぬ

「アララギ」一九五五年一一月号　其二　土屋文明選

72・獨房より見たる花火の美しく悲しかりしと書きて來

同号　其三

73・胸に載せて食ぶる四年に吾が乳房肉づきてまろくま

ろくなりたり

74・四年振りに聞く叔父の聲暫しして吾を見舞はず歸り行きたり

「アララギ」一九五五年一二月号　其二　土屋文明選

75・赧くなつて道子さんを見てゐる君の顔をわたしは横からじつと視てゐる

「アララギ」一九五六年一月号　其二　土屋文明選

76・生けるごと微笑む寫眞の君に向ひ話しかけゐし吾に氣づきぬ

同号　其三

77・素直な少年と云はるる汝のやすやすと嘘つく事を臥す吾は知る

「アララギ」一九五六年二月号　其二　土屋文明選

78・どの様な未來となるかはわからねど二人のみに通ずる言葉も出來ぬ

「アララギ」一九五六年三月号　其二　土屋文明選

79・苦しみて顔歪むれば君も同じ表情をして吾を見守る

同号　其三

80・受話器を耳に強く押し當てて今ぞ聞く遙なる菅原先生の張りある御聲

「アララギ」一九五六年四月号　其二　土屋文明選

81・わが傍らに版畫を刷りてゐし君が不意に獨りごとを言ひ給ふなり

「アララギ」一九五六年五月号　其二　土屋文明選

82・伸ばしかけし髪に手をやる少年の思ひがけなく淋しき瞳に會ひぬ

同号　其三

83・肉厚き君が手を双手にはさみつつ搖ぐ心を押し鎭めゐつ

「アララギ」一九五六年六月号　其二　土屋文明選

84・次々と強き言葉を吐く彼の時に自信なき表情となる

（一一）

を吾が見つ

「アララギ」一九五六年七月号　其二　土屋文明選

85・洗濯を終へたる汝の寄り來れば粧はぬ頬がかすかに匂ふ

「アララギ」一九五六年八月号　其二　土屋文明選

86・夢にさへ君は死にゐき君の亡骸を抱きしめてああ吾も死にゐき

同号　其三

87・父母に祕して血を喀くこの夜の部屋の空氣は蒼く見ゆるも

※86はのち、『道ありき』四三章で引用。87は同四六章で引用。

「アララギ」一九五六年九月号　其二　土屋文明選

88・祈らむと組みたる吾が手の熱くして今日一日の罪甦る

同号　其三

（一二）

89・勤めに行く者なき吾が家の遅き飯それより更に遅く吾が食ぶ

「アララギ」一九五六年一〇月号　其二　土屋文明選

90・繼子ではないかと疑ひし少女にてドストエフスキイの名を知り初めき

同号　其三

91・わが母に優しき言葉かけ給ふ君の傍へに涙ぐみゐつ

「アララギ」一九五六年一二月号　其二　土屋文明選

92・ギプスベッドに臥すのみにして吾の手の一日終ればいたく汚れつ

「アララギ」一九五七年一月号　其二　土屋文明選

93・祈ること歌詠むことを教へ給ひ吾を殘して逝き給ひたり

同号　其三

94・ギプスベッドに五年臥し來て吾が首の曲らざるまま癒えてゆくらし

95・美しき雄鹿の聲の錄音をひとり聽きゐつギプスの冷ゆる夜

「アララギ」一九五七年二月号　其二　土屋文明選

96・朱き房下げたる被布を着て行きし小學校入學式を想ひいでゐつ

同号　其三

97・教會の歸りに寄り給ひ臥す吾の傍へに君は辨當を開く

98・散歩する爲にと買ひ呉れし紫の草履を仕舞ひて今年も臥しぬ

「アララギ」一九五七年四月号　其二　土屋文明選

99・笑ふ如く笑はぬ如く寫り居り何と曖昧な表情のわたしか

同号　其三

100・炭塵に濁れる川の流るる街神威（かもゐ）の二年は唯に戀しき

「アララギ」一九五七年五月号　其三

101・兩膝を固く揃へて坐る吾の髪の亂れを直し呉るる君

「アララギ」一九五七年六月号　其二　土屋文明選

102・病院の様な匂ひがすると言ふ吾が部屋の匂ひに吾は氣づかず

同号　其三

103・湯のたぎる音か耳鳴りかわからぬを儚がりつつ靜臥に入りぬ

「アララギ」一九五七年七月号　其二　土屋文明選

104・死んだとばかり思つてゐましたと亡き君の手を取り泣きし時その時覺めぬ

105・「信仰で頑張れ」と遺言し給ひし君よわたしは人を愛しました

同号　其三

106・友が多しと羨まるれど健かな頃は一人の友もなかりき

「アララギ」一九五七年八月号　其二　土屋文明選

（一三）

107・愛想がよき故商人に向くと言はれ今日の一日はいたく寂しき

「アララギ」一九五七年九月号　其二　土屋文明選

108・土に寫れる自分の影をしみじみとみつめることなど何年ぶりか

同号　其三

109・君のバイクの音かも知れぬと待ちて居りギプスの中に身を固くして

「アララギ」一九五七年一〇月号　其三

110・前髪の垂るれば忽ち亡き君によく似る君を吾は愛しぬ

「アララギ」一九五七年一一月号　其二　土屋文明選

111・あした咲く朝顔のつぼみを數へ居りどこかでオルゴールの鳴つてゐる午後

同号　其三

112・襖のかげより君現はれよ君よ君よ癒えて綾子が訪ね來りしに

（一四）

「アララギ」一九五七年一二月号　其二　土屋文明選

113・幸福さうに君と並びて寫りゐる吾の笑顔に寂しくなりぬ

同号　其三

114・鉢の葉蘭を一枚一枚拭ひ居て不意にたち來る君の面影

「アララギ」一九五八年一月号　其二　土屋文明選

115・飾りある學生姿の亡き君の寫眞を何處の子かと訊かれぬ

同号　其三

116・骨の如しと云はれし細き己が手を泡立つクレゾールに靜かに浸たす

「アララギ」一九五八年二月号　其三

117・暗みたる外に氣づきて父と母の臥れる部屋に灯をつけに行く

118・十一月十六日四度（よたび）めぐり來ぬ雪のかの日が最後なりにき

「アララギ」一九五八年三月号　其二　土屋文明選

119・絶えまなくかかる電話にそれぞれに聲使ひわくるを臥して聽きゐつ

「アララギ」一九五八年四月号　其二　土屋文明選

120・雪の中歸り行く君振返り少年の如く高く手を上ぐ

同号　其三

121・視線放さず見つめ給ふを蔑（さげす）みのまなざしとのみ吾は思ひき

「アララギ」一九五八年五月号　其二　土屋文明選

122・君に似し人を君と間違へし事が暫ししして悲しみとなる

同号　其三

123・へばりつきし如く動かぬ冬の雲何かがこれから始まる如く思へり

「アララギ」一九五八年六月号　其二　土屋文明選

124・粉ミルク湯にとけゆくを待ち乍ら忘れたきこと又思ひゐつ

125・平凡な事を平凡に詠ひつつ學びしは眞實に生きるといふこと

同号　其三

126・早く死にたしとふ口癖は同じにて不倖せな姉は四十八歳となりぬ

「アララギ」一九五八年七月号　其二　土屋文明選

127・癒えぬまま果つるか癒えて孤獨なる老いに耐へるか吾の未來は

128・人間は日々に老い行く者とある化粧品の記事を讀み返しゐつ

同号　其三

129・酢の匂ふ飯をあふぎつつ今宵わが告ぐべき事を思ひぬ

130・日の沈む位置の移りを記すのみかかる平凡なるわが日記

（一五）

「アララギ」一九五八年八月号　其二　土屋文明選

131・癒やされて吾が出でて來し街中に路に苗木賣る店が
　續けり

同号　其三

132・梅の實にて作りし鈴を鳴らしつつ朝の目覺めを暫し
　ゐたりき

「アララギ」一九五八年九月号　其二　土屋文明選

133・人よりも暖かき手を持つ自が手の細く蒼きをしみじ
　みと見つ

134・年上の病める女を愛するは寂しき事と思ひ給はずや
　君

同号　其三

135・君の御骨を守る御堂(みだう)のカーテンに繼の當れるをさび
　しみて見つ

「アララギ」一九五八年一〇月号　其二　土屋文明選

136・花の咲くことなく終るダリヤをば朝あさ縁に立ちて
　見るかも

（一六）

同号　其三

137・パルプ廢液の酸ゆき匂ひは同じにて牛朱別(ウシユベツ)川に八年
　ぶりに來つ

「アララギ」一九五八年一一月号　其三

138・八百屋の前に西瓜を降し終るまで朝の屋上に吾は見
　て居り

「アララギ」一九五九年一月号　其二　土屋文明選

139・エレベーターの壁にもたれてボタン押し夜の屋上に
　獨り昇り行く

同号　其三

140・相共に祈る午後九時縫ひかけの布をたたみて灯を消
　しにけり

「アララギ」一九五九年二月号　其二　土屋文明選

141・法事より持ち歸りたるもの食べてわれら四人の夕食
　は終りぬ

同号　其三

142・君の兄上のバイクに送られてゐる今が倖せといふものかも知れず

「アララギ」一九五九年三月号　其二　土屋文明選

143・「さやうならなどと言はないで」と書きあればたやすく崩るる吾が心かな

同号　其三

144・吹きつくる雪に逆らひ歩み行く君と初めて街に出で來て

「アララギ」一九五九年四月号　其二　土屋文明選

145・拍手されてゐるわたし達婚約のしるしの聖書を取交しつつ

「アララギ」一九五九年五月号　其三

146・「夫には主の如く仕へよ」とふ聖句ありて朱線太く印して讀みぬ

147・あざやかに林檎の皮をむき給ふ君は如何なる夫となるらむ

同号　其四[8]　土屋文明選

148・いつ來ても人氣なき北大病院温室の石の長椅子に腰を下ろしぬ

「アララギ」一九五九年六月号　其二　土屋文明選

149・信仰の歌作らぬを指摘され歌作ること少なくなりぬ

「アララギ」一九五九年七月号　其三

150・未だ芽吹かぬアカシヤに寄りて目をつむるかくれんぼの鬼のわたしは

「アララギ」一九五九年一〇月号　其二　土屋文明選

※この号から「三浦綾子」名。

151・浴衣着て共に歩めばしみじみと結婚したる吾等と思ふ

152・ひる寝るを罪の如くに思ひつつ臥す哀れさを嫁ぎて知りぬ

同号　其三

153・幾度（いくたび）か夕茜雲を振り仰ぎ夫に寄り添ひ歸り來りぬ

（一七）

154・病む吾の手を握りつつ眠る夫眠れる顔も優しと思ふ
※151・152はのち、『この土の器をも』四章で引用。153は同一一章で引用。

「アララギ」一九五九年一一月号　其二　土屋文明選
155・病む夫の傍へに坐り思ふこと夫知らぬ過去の私のこと

同号　其三
156・電氣器具の揃へる厨に働きてある時さびしと思ふことあり
157・父母の晝寢してゐる家に來て用なき電話を吾はかけゐつ
※155はのち、『この土の器をも』一一章で引用。

「アララギ」一九五九年一二月号　其二　土屋文明選
158・結婚後も變る事なき寂しさに十年續けし日記をやめぬ

同号　其三
159・いささかの事に諍ひしを思ひつつ常より忙しく立ち働きぬ

（一八）

「アララギ」一九六〇年一月号　其三
160・病む夫を一人殘して眞ひるまの街に出で來つ風に吹かれて
※のち、『この土の器をも』一一章で引用。

「アララギ」一九六〇年二月号　其二　土屋文明選
161・夫の顔を兩手に抱きてくちづけぬ共に短き命と想へば
※のち、『この土の器をも』一一章で引用。

「アララギ」一九六〇年三月号　其二　土屋文明選
162・部屋中に行き交ふ度に抱きくるる夫よ今日はあなたも寂しいのか

同号　其三
163・暗き海吹きつける雨猫の聲十年前の自殺未遂の夜の印象
164・白魚の樣ななどと古風なる表現をして手を求め來る

男なり

※162はのち、『この土の器をも』一一章で引用。

「アララギ」一九六〇年四月号　其二　土屋文明選

165・又來ると別れしものを何故に逝きし君よ君の葬式に
　わたしは行かない

同号　其三

166・首曲げてみつむる夫の表情の亡き君に似るを今日は
　怖れつ

「アララギ」一九六〇年五月号　其二　土屋文明選

167・遠い黄色い空が鏡に寫りゐて事多かりし今日も暮れ
　たり

同号　其三

168・ライラックの蔭に寫りてゐる二人戰爭を生きのびて
　のちに死にたり

169・機關銃と戰車のポスターをバックにし吾ら教員二十
　一名の寫眞あり

「アララギ」一九六〇年六月号　其二　土屋文明選

170・金持に金貸し貧乏人に金貸さぬこんな世の仕組みさ
　へ知らず生き來ぬ

同号　其三

171・雪の上に雨降る街へ仕上りし夫の着物を取りに出で
　來つ

172・屋根裏の病室に夫を一人置き雪どけの道を歸り來り
　ぬ

173・今日よりは吾一人暮さねばならぬ吾が家の前に來り
　て佇みて居り

174・この家の中にもう一組の夫と吾がゐる樣な氣がして
　暫し立ち居り

「アララギ」一九六〇年七月号　其二　土屋文明選

175・賣られし馬路に死にし馬夫が語る少年の日の思ひ出
　優し

同号　其三

176・火山灰地の續く向うに輝きて煙上れる樽前山見ゆ

177・雪原とまがひしは銀色の沼にして枯葦原をわが汽車

（一九）

は行く

※175はのち、『この土の器をも』一一章で引用。

「アララギ」一九六一年一月号　其二　土屋文明選

（二〇）

178・椎茸も芋も大根も裏山より今採り來しを今食ぶるなり(9)

〈歌集未収録歌八首の図版〉作者名の後に作品

（20）

不斷草灯につやつやしやうやくに誰も彼もぞ寢しづみたる　岐阜　三原鈴子
○
井戸端に醫洗ふ音の聞ゆるは業餉は藷にするつもりらし　鹿兒島　石神靜雄
○
復活を祝ふ我らの讃美歌にマクセーさんも英語を和す　鹿兒島　神山南星
○
石井十次の奥津城を若き妻に敎へ高きすきの道を下りぬ　宮崎　荒井與十郎
○
たえまなく風南より吹き來る河原に居れば口渇きこゆ　宮崎　芳賀日出男
○
纏帶を干さむと妻は部屋に張る吾の貸つての捕縄見つけて　宮崎　森岩松
○
日に幾度か苗ひきに來る私を同業者が店先から妬ましく見る　愛媛　大久保福太郎
○
木の芽だちつんつんとして殺へることの峠の靜けさを好む　高松　西村實太郎
○
教員君らの要求肯へど事業税二割増徴には吾らが困る　香川　藤川幸助
○
ネクタイを結び直して果るる時近々と二重瞼が匂ふが如し　旭川　前川正
○
牛乳配達をして育ちたる吾なるに「お嬢さんね」と言ふ友が　旭川　堀田綾子
○
雪消水しだいに澄みて湛へつつ枯庭芝を深くひたしぬ　帯廣　上谷重朗

①「アララギ」一九五一年六月号
本稿での歌番号は「12」（四頁）

（81）

○
三月の風は南にまはりゐてオルガンをひくうなじにさはる　岐阜　三原鈴子
○
一日に幾度も天氣變ると言ふ福耀の山に朝日差しきぬ　岐阜　水野悅子
○
病後五年肺活量の増えざりき農を止めむと思ひ始めぬ　北海道　有賀正男
○
親力より衰ふる老を要もいふあはれ同じき歌かひにして　北海道　渡邊雅生
○
冬籠り彼岸も過ぎて室内に蠅散らばらせ俵編み始む　旭川　細口作太郎
○
早く死にたいとふ口癖は同じにて不倖せな姉は四十八歳となりぬ　旭川　堀田綾子
○
わが臥せる床下にして雪解の水の流れる荒き音する　根室　及川高行
○
ためらひつつ我に告げ終へ獣し居る汝を促し茶房を出づる　青森　佐藤玉治
○
浮雲もその影落す岩手嶺の雪はひとき朝茜染む　盛岡　堀内雨虹
○
試みに多團ひせぬ蕾覆の枝雪消えたれば芽のつきてをり　盛岡　浦田啓堂
○
とりどりのスカーフ並ぶ部屋すみのそのひそけきに杖一つ選ぶ　盛岡　石上りつ
○
笹むらに洩れ日さしたるひとときを灯のつきし加庭の明るむ　一關　新妻木人
○
眞白なる雪の藏王に春日てりて山襞の影はつかに見ゆる　宮城　大槻平七
○
仙臺　大平千枝子

②「アララギ」一九五八年六月号
本稿での歌番号は「126」（一五頁）

（17）

七月集　其二

土屋文明選

○　憶万木君　　別府　金石　淳彦

啓蒙學者の一人のみと河上肇をわが貶しめき君に答へて
誤解して吾に親しみ來し君と知りにしとき早く君にしし
失望し離れゆくさま氣付かざりき出で征きし事もわが知らざりき

○　大牟田　山本　和夫

雲仙のながながしき福今日も寄し三年はやくも過ぎて
海にむかひ低くなる麥田の早き穂の黒穗はみちに踏みしだかれつ

○　熊本　津田　治子

肌より沁み入るごときむなしさにわがゐるときの傍の夫
フレームに冬を越えたる濁木綿をうるほふこよひ窟く窓の外

○　宮崎　都倉　毅

再婚を祖母に薦められ淡居し昭和十年の母の日記出づ
新しき紺の袷を吾は着て母の見合に遇れてゆかれき

○　鹿兒島　深川　徹

病む吾にひそかに自殺强ひたりし父を鬼の如く恐れゐたりき
母ときあと親病む吾にわが父はことさらやさしくなり給ひけり

○　鹿兒島　加治木　一洋

いまはまで子に世話かけぬきびしさも口あけて祕に今ぞ安らぐ
吾に知らせず妹に最後の金くれきいまはまで父と寝ひ合ひき

○　旭川　堀田　綾子

癒えぬまま果つるか癒えて孤獨なる老いに耐へるか吾の未來は
人間は日々に老い行く者とある化粧品の記事を讀み返しゐつ

○　仙臺　三宅　奈緒子

ひとを嘆きすぐれば悲にふれたる春の野菜の目に沁むるかも
ゆきて逢はむと一途のことば幾日を澄ゐゐむ心また亂るなり

○　土浦　市毛　豐備

利根川の夕明りに河原ひきかへしし三人の中の白井田君亡し
この朝鶏しづまりてとまりゐる不斷草に流るる露繁くして

東京　大岡　亮

冬のかへで伸々立てりもみぢ葉の過ぎにし色も懸しく思ほゆ
花亜蘇の淡き紫の追憶に羽根澤の園の高き夕映

○　東京　小金井　つや子

暇得て雨の一日坐りをれば庭のざくろに鳥等の來たる
我が部屋も朝日差すかと輝ける白き光をうちまもりたり

東京　鈴木　順

かたくりの花に寂かに立ちたまふ君をぞたのむ病む夫も吾も
枕べによびては辭書をひかしむる痛みやはらぐよ日もありぬ

○　東京　西山　岱作

さまよふは冥那の巷のいづこなりや夢に苦しくいたびも見る
僅草斷ちてひと日二食の年暮るる老に愉しむいくばくかの酒

○　東京　佐藤　信英

③「アララギ」一九五八年七月号
本稿での歌番号は「127」「128」（一五頁）

吾が心今は鎮まりきにしかと桑の秀光る丘のぼりきぬ
野の道を咬まりつづけ夫の蹲りくる雪ふらず冬のすぎしこよひを
乾きたる空氣の中に寢につくとマスクをすればやや楽になる
有刺鐵線にて圍める中の白林荘かげる芝生にひたき飛ぶなり

○　徳島　駒木　悠二

幼きより苦しみたりしいくつかのその大方は母に言はざりき
移り來ては半一年とわが歩む街は冒山の影となりにき
君ら新しく住まはむ家に來て乾かゐ壁にコートを吊す
東京に今わがゐるといふのみに何ゆゑむむらぎもの心安きか

○　北海道　松吉　鋼三

目にしむ川岸の雪のかがやくに鈍くしばしためらひ倒木わたる
砂をまき風吹きつける鈍くに壁をまがりて雪の峡に入り行く
朝明より雪消す風の吹き出でて島崎の山雨になるらし
駒ヶ岳に冬の月光あまねくて稜線は纏く鹿部呼に

○　旭川　三浦　綾子

雪の上に雨降る街へ仕上りし夫の著物を取りに出で來つ
屋根裏の梅雪に夫を一人置き雪とけの道を蹲り來りぬ
今日より は吾一人暮さねばならぬ吾が家の前に來りて佇みて居り
この家の中にもう一組の夫と吾がゐる様な氣がして暫し立ち居り

○　弘前　近藤　惇

赤鉛筆いくたびか床に取り落し校正はげむかへる暑さに
鳥威の箔星屑の如く光り坂下に夜の田のしづもりぬ
颱風のあとの明るき雨過ぐるここの草原に白き蝶多し

○　仙臺　三宅　奈緒子

うすあかきみづ木の梢に小鳥ゐて鳴くに苦しふまた逢ふ日なく
別るるまでの經緯おもへば苦しくて蹲りゆく砂捲く風のなか

④「アララギ」一九六〇年六月号
本稿での歌番号は「171」～「174」（一九頁）

（二一）

注

(1)「資料紹介「旭川アララギ会々報」目次一覧」(活水学院日本文学会「活水日文」二四号、一九九二年三月)、「「旭川アララギ会々報」における三浦綾子の短歌その他」(活水女子大学・短期大学「活水論文集」三六号、一九九三年三月)。本稿の「旭川アララギ会々報」及び誌名変更後の「旭川アララギ会報」「旭川アララギ月報」の短歌は、右からの引用である。なお、これらの短歌はのち、漢字表記を改めて上出恵子氏の『三浦綾子研究』(双文社出版、二〇〇一年)に収録されている。

(2) 具体的には、12、126〜128、171〜174の歌である。巻末に、図版で示しておいた。

(3) たとえば、初版である『道ありき――わが青春の記――』(主婦の友社、一九六九年一月三一日発行)と、普及版である文庫版『道ありき(青春編)』(新潮文庫、一九八〇年発行　本稿では一九九九年六月二〇日発行の四九刷を使用)を比べると、旧かな・旧漢字を新かな・新漢字に直したり、ルビなどに異同が見られる。ルビはおそらく読者に配慮してふったものもあるのだろう。

(4)「其二　土屋文明選」は、全国の会員が葉書に五首(のちに三首)以内を書いて投じ、選出される欄である。三首〜一首が採られ、当初、掲載順は土屋文明の選歌眼にかなった順序であった。この号で堀田綾子は二首採られ、しかも、七六八人中八六番目の掲載であり、新人ながらひじょうに評価されていたことが窺える。

(5) この号以降、地域別の掲載順となった。のち、二首掲載については土屋文明による順位づけとなったが、一首の場合は地域別の掲載順として定着した。

(6) それまでは「旭川　堀田綾子」名であったが、この年二月に旭川日赤病院から札幌医科大学附属病院に転院したため、六〜一一月号は「札幌」の住所表記となっている。

(7)「アララギ」巻末の「其三」は、五味保義を中心とする編集部による選歌欄であった。全国の会員の各六首〜一首が掲載され、その月の秀作選といった印象である。一九五七年七月号までは、特に選者名の記載はなかったが、同号から、複数の選者名が明記されるようになった。五味保義のほか、小暮政次、柴生田稔、吉田正俊、落合京太郎らが選にあたっていた。

(8)「其四　土屋文明選」欄は、「其二　土屋文明選」に投稿されたが、「頁数其他の関係で本欄にのせ切れなかつたが、なほ捨ててしまふのに惜しいと思はれるもの」(「アララギ」

一九五九年五月号）の欄で、地名記載はなく、作品と氏名のみ小さな活字で掲載されている。

（9）事情は不詳だが、『三浦綾子全集』第一七巻（主婦の友社、一九九二年）所収の『共に歩めば』には、以下の三浦綾子「一九六一年」作品三首が未収録である。

椎茸も芋も大根も裏山より今採り来しを今食ぶるなり

石多き畑に人は苦しめど四囲の官林豊に茂りゐき

林間鉄道のありたる道と夫に聞き明るき林に入りて行くなり

（二三）